

Title	雑体書の特徴について：『篆隸文体』と『篆大学』を例に
Author(s)	全, 容範
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 150-151
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53303
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

雑体書の特色について

—『篆隸文体』と『篆大学』を例に—

全 容範／京都工芸繊維大学博士後期課程

雑体書というのは、広い意味で漢字の装飾体を指す。漢字は、中国の殷の時代（前1740—前1120）に、いわゆる甲骨文字が成立した以降、今日の中国で用いられている「簡体」に至るまで、歴史上、さまざまな書体が生み出されて来た。篆書、隸書、行書、草書、楷書といったものがそれである。雑体書なるものは、こうした漢字一般について言われる多様な書体と関係しているが、それは、「芸術の書」に用いられる書体ではなく、衣服や器や割符、扁額など、特殊な用途に用いられてきたものである。私は、こうした雑体書にこそ、漢字の意匠のすべてが集約されているように思われる。

雑体書は、春秋戦国時代（前771—前221）に現れたと言われる。この時代には多くの群小の国に分かれ、独自の文字を使用しており、この文字が雑体書に繋がる意匠性をもっていたと考えられる。秦の始皇帝が中国全国を統一（前221）し、文字の統一政策を行い、秦の国の文字と異なる文字は廃止した。その際、多くの伝来の古文や雑体書が消失してしまったと思われる。しかし割符や兵器に専門的に用いる、幾つかの雑体書は公に通用されていた。漢の時代や、王莽が建てた新の時代、後漢の時代にも新に雑体書が作られたり、前の時代の雑体書を改めたりしたことが伝えられているが、雑体書が最も盛んに用いられた時代は六朝時代（220—589）である。この時代は、中国の書の歴史においてきわめて重要な時期である。個性がより強く出しうる行書や草書といった書体が形成され、書が人の個性

的な精神を表現する媒体になり、「芸術の書」が成立した。こういう書についての新たな局面は、雑体書の製作にも影響を与えたと考えられる。六朝時代以降、中国では雑体書は、衰えていったと言われる。しかし、明の時代（1368—1644）には、『金剛經』を写した『明刻三二篆体金剛經』が、清の時代（1616—1912）には、清の皇朝の発祥地を称えた『乾隆御製三二体盛京賦』が著され、雑体書は絶えることなく後代へ受け継がれていた。

なお、雑体書の書物は日本や韓国に伝えられている。『篆隸文体』と『篆大学』とがそれである。『篆隸文体』は、南齊（479—502）の蕭子良（460—485）が著した『古今篆隸文体』を、空海（774—835）が帰朝の際（806）持ち帰って、鎌倉時代（1192—1333）と推定される時期に筆写された。現在は京都国立博物館に所蔵されている。一方、『篆大学』は、韓国の朝鮮時代（1392—1910）に金振興という人が、明の朱之蕃から習った雑体書を用いて、儒教の經典の『大学』を写したものである。

発表では、『篆隸文体』（四九種）からは、「絵画性向の強い雑体書」である、科斗書の「科」・「浮」、魚書の「魚」・「行」、蛇書の「蛇」・「曲」を選び、『篆大学』（三八種）からは、「記号的性向の強い雑体書」である、倒薤書の「如」・「見」、垂露篆の「生」・「馬」、上方大篆の「天」・「子」を選んだ。そしてこの十二種の文字を通常の篆書、楷書、草書と比較しつつ、雑体書の文字意匠の特色の解明を試みたが、ここでは各々書体の文字意匠の

主な特色の事項のみを要約する。

「絵画性の強い雑体書」の科斗書は一匹のおたまじゃくしが、楷書の文字の一画を象るのを原則としたもので、おたまじゃくしの頭が起筆に当たり、尻尾が収筆に当たる。しかし、「科」の四・五画を象ったおたまじゃくしの頭の部分は、収筆に当たり、尻尾の部分は起筆に当たる。また、「浮」の八画は二匹のおたまじゃくしが象っている。こういうことは肉筆の筆跡が重んじられた表現だと思われる。このような特色は、魚が楷書の字画を象った魚書にも見受けられる。魚書の画を象っているほとんどの魚は、側面像であるのに対して、「魚」の三・五画と四・五画を象った魚と、「行」の六画を象った魚は俯瞰像である。この異なった視点の魚の表現は、肉筆の筆跡からなると思われる。また、蛇書の「蛇」と「曲」は、その字の草書の筆跡を象ったものである。即ち、「蛇」の「虫」と「它」が連線で繋がった筆跡を、一匹の蛇が象っている。「曲」を旋回する一匹の蛇が象っている。

もう一つ「絵画性向の強い雑体書」の主な特色として指摘したいのは、文字のイメージの表出において優れている点である。科斗書の「科」と「浮」の泳ぎ出すおたまじゃくし、魚書の「魚」の躍動する魚、蛇書の「蛇」、「曲」の柔軟な蛇の様子は具象的な絵画性をもっている。とくに、魚書の魚のなかには、それが本来もっている質感が見受けられるものがある。こういうことが文字の全体的な印象を絵画的に仕立て、豊かなイメージの伝達を可能にしている。

「記号的性向の強い雑体書」の倒薤書は上半部が篆書の形で、下半部が薤の葉の形である。即ち、例として取り上げた「如」の「女」と「見」の下半部の画が薤の葉の形をしている。この薤の葉の、太い箇所と細い箇所の表現には、巧みな用筆が窺われる。太い箇所に

は、筆の穂先を表さないように書くことの蔵鋒が、細い箇所には毛筆の穂先が表れるように書くことの露鋒が、用いられていると思われる。垂露篆は、篆書の下半部の末筆の箇所に、垂れる露が表されるものである。例として取り上げた「生」と「馬」の下半部の末筆には、垂れる露がある。この表現のためには、主に蔵鋒の用筆が用いられたと思われる。倒薤書と垂露篆においては、薤の葉や露が表された箇所だけではなく、その模様が連結された字形の上半部も重要である。上半部の篆書の箇所と、下半部の薤の葉や垂れる露とが調和され、自然な倒薤書と垂露篆が成り立つと思われる。

尚方大篆からは、篆書の字形が図案化されたのが見受けられる。この書体の特色は、方形のなかで、垂直と水平の画が幾度も折れるのである。この折れた画は、実際の文字の形作りに寄与する画と、それと無関係の装飾の画で分けることができる。尚方大篆の例の「大」と「子」は、実際の文字の画と、その画の収筆の箇所から書き始めた装飾の画とが、方形の空間のなかで、画の長さや太さ、位置などが測れ図案的に表現されている。

以上六種の十二字から、雑体書の特色を考察した。ここで明らかになった雑体書の文字意匠の主な特色は、今日の文字デザインにおいても重要視され、今後の研究が進むことによって、さらなる雑体書の文字意匠の特色を見出すことができると期待される。